

歴史概念としてのアジア

——神学と哲学の間——

森本あんり

『アジア神学講義』を担当してもらった若い編集者が納本に来て、きれいに出来上がった本をためつすがめつ撫でさすっているわたしに、ふとこんなことを尋ねた。「神学と哲学の違いは、つまるところ歴史をどう見るかによるのでしょうか。」ご本人は門外漢の素朴な問いだと謙遜なさったが、これは実に興味深い観察で、拙著を読んでそのような見解に至ったとすれば、わたしはたいへん優れた読み手を用いた一番に獲得したことになる。

「神学と哲学」というふうに並べてみて、ふつうわれわれがまず思い浮かべるのは、「啓示と理性」や「信と知」などという対比であろう。わたしも前者では「存在論と救済論」ないし「存在と成就」というしかたでこの対比をとらえていた。しかし、この編集者の問いは、こうした組み合わせとはまったく別の角度からその違いを見ており、わたし自身もその周りを歩いていながら明確には主題

化していなかった対比を言い当てている。そしておそらく、このような認識は、神学がアジアという一種の異化作用をもつ文脈に会って初めて浮かび上がってくるものではないか。

哲学にとり、過去の人間がどのような考えをもっていたかということは、せいぜい参照の対象であって、そこから学ぶことは大いにあり得ても、それに拘束されることは原則的にない。だが神学においては、歴史の中で人々がどのように考えてきたかは研究の重要な素材を構成する。言語学のカテゴリーで言えば、人工言語と自然言語の違い、ということになろうか。神学という学問は、特定の歴史的な人間共同体の中で実際に用いられてきた信仰の慣行を出発点とする実定学である。

このような区別だけでは、もちろん単純明快というわけではない。神学にも宗教哲学的な基底部分を扱う基礎神学があり、また現実かてきた〈lex orandi, lex credendi〉という格言がある。その意味は訳し方によって多少変わるが、これをどのように読むにせよ、祈りの法すなわち人々の実際の信仰の実践と、信仰の法すなわち教義や神学などの規範形成とが密接不可分である、という関係が述べられていることは確かである。神学は、人々の〈lex orandi〉から出発する。あるいはそれを成り立たしめている啓示の事実から出発する。それは、芸術作品がまずあってこそ批評学があり、言語がまずあってこそ文法があるようなものである。アンセルムスの神学を特徴づける標語〈fides quaerens intellectum〉も、すでに成立している信仰から出発してその知解を求める、という神学の「後追い」

ら出発するとはいえそれを文脈の彼方から批判するという性格があることも事実である。逆に哲学も、世界内存在としての現存在の事実性から出発するという点では同じだと言われるだろうし、近年では哲学も特定の文化的前提や信憑性構造に依拠した単なる歴史的で地域的で共同体的な営為にすぎない、とするポストモダンの論客が多いので、その差は案外に小さいのかもしれない。けれども、歴史や伝統へのこだわりは、哲学には原理的に不要であり、神学には必要不可欠だ、という大雑把な区分けはなお可能であるように思われる。

神学の歴史への係留を物語るのに、カトリック教会で長く使われ

〈新刊〉 アジア神学講義

森本あんり グローバル化するコンテクストの神学 代表的神学者四人を取り上げ、共感的理解とともに必要な批判を加えた本邦初のアジア神学入門。神学に本質的な論題を問い直すアジア神学を、キリスト教二千年の歴史に新たに追加されたキリスト教神学の生ける伝統の証と捉えて、互いに隔たった伝統的神学と伝統批判的神学とを結ぶ架橋の試み。

菊・244頁・3800円

ジョナサン・エドワーズ研究

森本あんり アメリカ・ピューリタニズムの存在論と救済論 現代アメリカの思想的源泉である十八世紀の思想家に光をあてた、初めての本格的な研究。

A5・350頁・8500円

なぜキリスト教か

古屋安雄編 中川秀恭先生八十五歳記念論文集 宗教多元主義と文化相対主義の現代世界において生じた問いに答える、一線の学者三三名の論文集。

A5・810頁・15000円

憧憬の神学

小田垣雅也 キリスト教と現代思想 イエス伝学の考察により近代的学問の真理論的反省を、更にニュー・サイエンスから学問と神秘の関係を解明。

四六・214頁・2800円

現代神学の動向

沖野政弘 後期ハイデガーからモルトマンへ オットとモルトマンにおける三位一体論と聖霊論の分析により、現代神学の到達点と将来への展望を示す。

A5・320頁・6500円

的な性格を表現していると言えよう。哲学はしばしば、所与の歴史的特異性を捨象して理性宗教を作り上げようとしたが、〈*lex credendi*〉としての神学は、どこにも歴史的な係留点のない空中楼阁を建築することはできない。

*

「アジア神学」は、アジアの〈*lex orandi*〉を自覚的に取り上げようとするキリスト教神学の試みである。キリスト教の人口動態がここ一世紀の間に大きく変化し、世界のキリスト教徒の三分の二が非西洋に住むと言われるこんにち、アジアはキリスト教がこれまでに辿ってきた二千年の歴史とどう折り合いをつけるべきか——このような問題設定は、従来も神学の「土着化」ないし「文脈化」という題で論じられてきた。しかしそこには、まずいつでもどこでも誰にでも妥当する神学一般があり、その上でこれをアジアという文脈に適用するという「基本と応用」の構図が前提されている。文脈化神学の真の発見は、これまで普遍性を標榜してきた神学もまた、その文脈的な出自を自覚していなかったただけだ、ということである。われわれも、たとえばアメリカの神学がいかにアメリカ化した神学であることはすぐに察しがつこうが、宗教改革者ルターやゲルマン的背景、さらには初代教会のギリシア的背景にまで考え及ぶ

張する人もある。時にそれは、欧米の植民地主義や覇権主義への反感も絡み合って、過激な自己主張となる。だが、原点回帰を叫ぶ根本主義は、聖書という書物そのものもつ伝統性に突き当たってすぐに座礁してしまう。歴史的な前後関係を見れば明らかのように、まず聖書があつてそこから伝統が流れ出たのではなく、聖書そのものがむしろ伝統の産物だからである。聖書自身にも多様な伝統が流れ込んでおり、またその解釈をめぐるこそ多様な伝統が生み出されてもいる。したがって、聖書を指さすだけでキリスト教の結節点が特定できるわけではない。

「伝統」は、プロテスタント神学の中では特に冷淡に扱われてきた。教会の教導職の教えを聖書と並ぶ正統性の根拠と見なすカトリック的な伝統観への批判からであるが、カトリックの伝統観はプロテスタントの教科書が括るほど皮相ではないし、それを批判するプロテスタントにも当然プロテスタントなりの伝統がある。むしろ、伝統を軽視しこれを理性の十全な活動に対する不当な制約と見なすその発想自体が、実は近代西洋の啓蒙主義に特徴的な思惟であつて、かえって伝統に束縛された姿であるかもしれない。荒削りなアジア神学者たちの問いは、アジアの独自な自己表現であるかに見える、実は西洋由来のポストモダンリズムやコロニアリズム批判に乗っているだけの場合も多く、裏返しのオリエンタリズムに加担してし

と、はてどうしたものか、と立ち止まらざるを得ない。そこでは、プロテスタンティズムの起点、いやキリスト教の起点そのものの歴史限定的な性格が明らかにされるからである。たとえば、キリスト教信仰の中核を構成する三位一体論などの基本信条は、「実体」や「本質」などといったきわめてギリシア的な概念や言語をもとに作られている。もしそれを文脈化の一端と見なすならば、ギリシアに代えてアジアの概念や言語で同じ作業を行うことに何の不都合もないはずである。拙著が取り上げたアジア神学者の中には、陰陽論や易を用いて三位一体論の大胆な再構成を試みている者もある。そのような試みが成功しているかどうかはともかく、仮にそれらがみな同等の権利をもつ解釈であるとする、われわれはここで従来のキリスト教とは根本的に異なったキリスト教に出会っていることになるのであろうか。その場合、キリスト教は何をもって自己をキリスト教だと認めることができるのであろうか。あるいは、そのような全世界的なキリスト教のアイデンティティやメルクマールを求めること自体が、そもそも時代遅れなのであろうか。

キリスト教の多様性に最終的な一致を見いだそうとして、聖書に立ち帰ることを求める人もあるかもしれない。アジア神学の中にも、神学の性急なアジア化を求めるあまり、これまでのキリスト教の歴史をすべて飛び越えて聖書の源泉に無媒介に接することを主

*

まっていることもある。伝統の意味を追求しその意義を定位することとは、アジア神学の問いを研ぎ澄ます助けになりこそすれ、頑迷固陋な伝統主義をもちだすことではけっしてない。

「伝統」と並んでこんにちあまり受けのよくない言葉が「正統」である。正統と言えば異端、異端と言えば異端審問に魔女裁判、などと早手回しの連想が働いて、神学者としてはあらずもがなの弁明を強いられることになる。正統と異端のトポグラフィはもう少し実態に即して描き直されねばならないと思っているが、アジア神学にとって当面の問いは、歴史上新たに生み出される人々の信仰表現がどのようにして正統性を獲得するのか、ということである。さきの言葉を使えば、人々の〈*lex orandi*〉がどのようにして〈*lex credendi*〉となつてゆくのか、ということである。生きた共同体の信仰は、二千年の間まったく変化せずに続いてきたわけではない。近年のマリア論の例を見てもそうであるように、はじめは明らかに〈*lex credendi*〉の外にあった〈*lex orandi*〉のうち、あるものはやがて取り込まれ、他のものは消えてゆく。その正統化のプロセスはどのように働くのであろうか。

この点でわたしが最も多くを学んだのは、シュライターというカ

トリック神学者の理解である。シュライターは、チョムスキーの生成文法論の基礎を援用して、信仰表現の歴史的発展に必要な「ゆとり」の所在を説明している。ある言語社会で言葉が変化する際には、まず実際の運用が変化し、やがてそれを追認するかたちで文法が変化する。文法は、われわれの言語運用に先立ってこれを逐一規定しているのではなく、むしろそれを後から限定的に記述しているにすぎない。ここで、文法は正統に、言語能力は信仰に、そして言語運用は典礼や祈りや歌や神学などに対応する。人々の信仰表現は、常に厳密に正統と相即しているわけではない。その間の揺らぎに、新たな信仰表現を時代ごとに生み出す自由の息づく空間がある。正統がしばしば「アナテマ」のような否定形で定式化されるのも、文法の機能と似ている。正統も文法も、正しい運用よりも正しい運用を見つけたすという消極的で統制的な機能を受け持っているからである。だから教義は、許容される信仰表現の最大外周を囲うだけで、その内容を明示的に特定して記述することはないのである。アジア神学は、このようなゆとり空間での実験であると言えよう。歴史はやがて、その中から正統を生み出すかもしれない。神学はここで、一方ではみずからも新しい信仰表現の一部でありつつ、他方ではその正統化のための検証機能を担うことを求められている。

正統の問題は、拙著結章で取り上げた「宗教混淆」の問題にもつながっている。アジアのキリスト教には宗教混淆がつきものである。しかし、歴史を振り返るならば、同じ現象はアジアに限らずキリスト教の全歴史を通して見られるものであり、さらにはキリスト教だけでなくすべての宗教が必ず通らねばならない一段階であると言えよう。宗教混淆という言葉はそれゆえ、記述的用語としてはもはやほとんど無内容であることになる。これも、アジア神学の異化作用によってはじめて気づかせられたことの一つである。アジア神学の提起する問いは、総じて周辺や例外を問う特殊事例の問いであるかに見えて、それをそれとして認識するためには取りも直さず中心や本質の正確な再認識が必要となるような問いである。かつて前世紀初頭に盛んであった「キリスト教本質論」の問いが、ここで新たな視角から提出し直されているとも言えよう。

日本の神学の眼差しは、相変わらず欧米を向いたままである。われわれの国が本当にアジアの仲間に入れてもらえるかどうかはやや心許ないが、少なくとも文化的には儒漢圏の共通性もあり、アジアに目を向けることは自国の理解を深めることにもなる。欧米でもアジアでもよく論じられているこのアジア神学が、日本国内でももう少し盛んになればと願っている。